2020年度　入門講座

**第30課　　叙階と奉献**

教会の本質と使命

　　教会は「神の民」としての「キリストの体」である。それはすでに完成されたもので

はなく、「頭であるキリストに向かって成長していく」(エフェゾ４：１５)もので、旅する教会なのである。教会は、神の国のしるしとなり、その道具としての使命を持つ。

教会は、ミサを中心にしてキリストに養われ一層キリストの体になっていく。あくまでも神の救いの計画に仕え、全世界の人々を神の国へと招く役割を持つものである。人々に信仰による自由、愛の交わり、歴史を超えるいのちへの希望を告げ、人間性の回復と創造の完成へと人々に呼びかけるものである。

Ⅰ　カトリック教会の特徴

　　1.使徒信条「唯一・聖・公・使徒継承」

1. **教会の一致**は、イエス・キリストへの同じ信仰、秘跡に結ばれ、多様性の中で

連帯を大事に、相互に認め合うことによって実現される。

カトリック教会は明確な形で一致を保ち続けてきた。全世界で二万にも及ぶ教派

に分かれてしまった諸教会との対話を重ねながら、共に神の国をめざして、主キ

リストに向かって成長し、一致を求めて歩み続けている。

2021年のキリスト教祈祷一致週間は1月18日～25日

1. **教会が聖である**こととは、この世にあって、神に選ばれ神に属する教会であることを意味する。

神から始まり神へ向かう回心の歩みであって、倫理的な完全さを意味するのではない。

1. **教会の普遍性；**「カトリック」とは「普遍的」という意味である。

真の教会は、特別な民族や文化に偏ることのない、普遍的なものである。

110年頃、アンティオケアの聖イグナチオが初めて使った言葉である。

1. **使徒継承**イエス・キリストに基を置く教会は、イエスによって選ばれた十二使徒に継承された。彼らの土台の上に永続的に立つ教会である。教会は十二使徒の後継者を司教としている。

真理の主における一致を求めて旅を続ける「旅する教会」は、諸教会と対話を重ねながら主キリストに向かって成長していく。

　2．教会の第一の使命は福音宣教；

　　　　イエスの生涯は「神の国」の福音を宣べ伝えることであった。したがって「神の国」の宣教こそ、教会の存在の根拠である。

　　　　この世界の様々な混迷の中で傷を負い闇の中に沈んでいる人々に対して、

信仰による真の自由と喜びを呼びかけることを使命とする。

1. イエス・キリストの福音を通して、人間の尊厳を伝えること。
2. イエスの救いに招かれているすべての人々が、互いに許しあうことによって、世界の平和と一致の実現のために働くこと。
3. 環境汚染や生命操作によって生命が脅かされている世界の中で、真の人間性の回復を告げること。
4. ひとりでも多くの人が神の福音に触れ、イエス・キリストと出会い、信仰に導かれること、

これらが神の民としての教会の役割であるが、具体的には神への愛と隣人愛をイエスに倣って生きること。これが神の国のために働くということである。

　3. 教会は**典礼で救いのわざを記念**し祝う

　　　　教会共同体は、典礼を通して、救いの出来事を再現し、現在化する。

Ⅰ　教会での奉仕のために任命された聖職者の役務

司祭職

　「司祭は神の民の中において特別に選ばれている意味で分けられているが、それはキリストの共同体や人々から分かれているという意味ではなく、却ってその中で、キリストが選んだ司祭として仕事に専念できるため」（公会議文書）である。

弟子たちはキリストから受けた司祭職の権能と使命を、後継者である司祭に伝え現在に

至っている。司祭はこの世に生活しながら、この世に隷属することなく、キリストから

委ねられた使命を完全に達成するために献身する。

1. 預言職（教職）；福音（キリストの言葉）を宣べ伝える役務。
2. 祭司職；神を礼拝する典礼、ミサを行う権能。

イエスの最後の晩餐の席で、弟子たちにミサを捧げる権能が与えられた。

\*「取って食べなさい。これはわたしの体である。」「皆この杯から飲みなさい。これは罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの契約の血である。」

③　司牧職；罪を許す権能が与えられ、信徒を司牧する任務。

＊「あなたがたが地上でつなぐことは天上でもつながれ、あなたがたが地上で解くこ

とは天上でも解かれる」（マタイ１８：１８）

＊「誰の罪でもあなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でもあなたがたが

赦さなければ赦されないまま残る。」（ヨハネ２０：２３）

組織　人間が共同体を作る時、運営のために組織が必要となる。その基本となったのは、イエスと弟子たちの関係である。

使徒たちを中心に生まれた初代教会では、長老、監督、執事という役職が定められてい

たが、２世紀になると、司教、司祭、助祭という３段階の職制に統合され、カトリック

教会、正教会、聖公会では現代にいたるまで継承されている。

　　　　　　教皇　←　枢機卿　←　大司教（東京・大阪・長崎管区）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　↑

　司教　　使徒の後継者

　　　　　叙階の秘跡による奉仕職　　司祭

　　　　　　　　　　（三つの役職）　　　　　司祭の準備

　奉仕職　　　　　　　　　　　　　　助祭

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　終身助祭

　　　　　　　　　　　　　　　　　　一般信徒

　　　　　　叙階によらないもの　　　　　　　預言職、祭司職に与る

　　　　　　　　　　　　　　　　　　修道者

教会の司牧者のモデルはイエス・キリストご自身である。キリストの共同体を指導する人は、その羊のために生命を捧げた主イエスのように、人々に仕えるために遣わされるのである。

教会の歴史に見てきたように彼らは常に忠実であったという意味ではない。にもかかわらず、彼らを通じて主イエスは教会を導き、人類をキリストの救いと愛に招く使命を果たす力を与え続けてきた。

Ⅱ叙階の秘跡

司教・司祭・助祭の役職は**「叙階」**の秘跡によって、教会の主であるキリスト自身から、教会を導くための特別の任務と権能が授けられる。

司教となる叙階式を行う場合は、三人の司教が立ち会って、司教となる人の頭の上に手を置いて（按手）聖霊が降ることを祈る。司祭の叙階は一人の司教の立会いの下に行われる。

１教皇（ローマ法王）

イエスから教会の頭として選ばれた使徒ペトロが初代教皇（ローマ法王）である。ペトロは最後の伝道地ローマの司教であったので、ローマが教会の本拠地となり、歴代の教皇はローマの司教を兼ねることになる。

教皇の特別な使命は、信徒を信仰と生活の統合に導き、全教会を統治する任務を負う。このように教会の教えや習慣など監督指導する最高の牧者としての教皇の務めを「教導権」と呼ぶ。

初代教会の使徒たちから任務と権能を受け継いだ教皇（ローマ司教）を中心とする司教・司祭たちの交わりが、現在の教会全体を導く役割を果たすものである。

ペトロは使徒たちのまとめ役であったので、ローマの司教が世界各地の司教たちのまとめ役を果たすようになり、教皇と呼ばれるようになったのである。ペトロ以来２６５人の教皇が即位しているが、前回見たように、中には人間としてふさわしくない人材も登場している。しかし不思議なことに教会も教皇も中断したことはなかった。キリストの約束通り、聖霊によって守られてきたことの証である。

\*「不可謬」権；マテオ16: 18, 28:20 ルカ10:16,ヨハネ1：42、16:13, 14:26, 21:15-17,

　キリストが常に共にいて教会を信仰の真理からそれないように導いているということで、教皇のもとで、司教団が共に祈り、考え、話し合った後に決定する事柄は、キリストの保証の言葉に従って、いつも誤謬から守られるということである。

　　[1870年　第一バチカン公会議]

「ローマ教皇が信仰および道徳に関する事柄について、教皇座から厳かに宣言する場合、その決定は正しく謝り得ない」という教義を発表。

１８５４年ピオ９世「聖母の無原罪」、１９５０年ピオ１２世「聖母被昇天」

教会内外で多くの議論を呼んだが、教皇の言葉は何でもかんでも誤りがなく反論できないということではない。厳しい条件を付けて行使されるものである。世界の教会の霊的責任者としての宣言で、あらかじめよく検討され、十分に納得され完成された信仰の事柄について使徒的権威をもってされる公式宣言であって、全世界を対象とし、発言が教会の過去の教えに矛盾しないことが条件。教会がこの権威をもって教義として宣言したのは上記の二回だけ。これからもめったにないだろうと言われている。

2.司教

司教たちは、キリストの十二使徒の後継者である。司教は、教皇のもとにキリストの代理者として、教区（日本は１６の司教区）を統治し、キリストの福音を宣べ伝えることや典礼の総責任を持っている。

3.司祭

司祭は司教のもとで福音宣教と信徒の司牧に従事する使命を委ねられている。

　全信徒の参加する祭司職とは区別される。

司教は教区をさらに区分した小教区の司牧を司祭に委ねる。小教区はキリストの共同体の一番基礎的な単位になる。司祭は、ミサを捧げ、秘跡を授ける尊い任務を遂行できるよう、キリストと結ばれ、キリストの心を心とするよう日々努めるのである。

キリストの命じられたパンとブドウ酒をもって主の晩餐を祝うミサの司式。また、教会共同体の信徒を一致させ霊的に導くのも司祭の特別な役割、さらに委ねられた教会が、キリストの福音を世界に向かって発信する教会となるように指導する任務をもつ。救いのしるしとしての教会共同体を建設することを目標に、信徒の自主性を啓発し生かす努力をしなければならない。オーケストラの指揮者のような存在。弱い立場にある人々や小さき者に開かれた教会づくりが急務。

\*司祭の独身性

カトリック教会では、中世紀ごろから司祭の独身性が制度として取り入れられた。それによって、司祭は一生独身を貫く決意のもとに叙階される。独身で生涯を通すことは、主イエスに倣って無私の奉仕をするためである。

個人的な心配や家庭の雑事に心を奪われることなく全面的に献身できるため。人間である以上、人間としての悩みや欲求も強いはずであるが、独身生活を守ることができるのは秘跡の力と恵による。独身性は規律の問題であって信仰の問題ではない。変えていくことができる事柄であるが、１０世紀にもわたる教会の経験から弊害よりも益が多いことに裏打ちされている。そういう伝統には重みと妥当性がある。仮に独身性を見直すとする場合、それは普遍的な選択ではなくて文化的理由によるものである。

伝統的に洗礼を受けた男子のみであるが、一部の国の聖公会で女性を叙階(1970年代)

　\*　修道司祭と教区司祭

　　 修道会はその会の創立者とその後継者たちが育てた会の精神、理念に基づく活動方針がある。それに従って具体的な使徒職に従事している。（教育事業、福祉関係の仕事・など）

修道司祭も教区司祭も、キリストの招きに応えるという点では同じであるが、誓願を立て、創立者のカリスマ(特色)を通してキリストに結ばれる修道司祭と、使徒継承の流れの中でキリストに結ばれる教区司祭はその役割において異なる。教区司祭の上長は司教、修道司祭の場合は会の上長。司教は小教区の司牧を修道会に委託することがある。司教も修道会も同じローマ教皇に従う。

　4.助祭の奉仕職

　　　助祭は教会に奉仕するために叙階された役務者で、司祭職の資格はない。

説教、聖体奉仕者、病人訪問、要理教授などの役目を果たす。

　　　　終身助祭；第二バチカン公会議によって終身助祭制度が制定された。

「司祭職のためではなく、奉仕のために按手を受ける」(教会憲章)

＊「み言葉の奉仕」(説教、要理教育、福音宣教)

＊「典礼の奉仕」（洗礼の秘跡、聖書朗読、聖体授与、司祭司教からの権限を

　　　　　　　　受けることによって結婚式の司式）

　　　　　＊「愛の奉仕」（病人や貧しい人々に対する奉仕、青少年への奉仕・・・）

Ⅲ叙階によらない奉仕職　Ⅰペトロの手紙2：9

キリスト者すべてが祭司職を担う。洗礼を受けた者は、キリストに結ばれ、キリストの霊に生かされて、自分自身の生活を神に捧げて、世界の人々の救いのために祈るという意味において、祭司職に召され遣わされているのである。

三つの奉仕職

＊預言職に参加；人々を信仰に招き、人生の意味を伝えること。

「あなたがたが抱いている希望(信仰)について問いただす人には、いつでも応えられるように用意していなさい」(Ⅰペトロ3：15)

＊祭司職に参与；すべての信徒がキリストによって神に結ばれて聖別されている。

全人類のために神の赦しと憐みを乞い求める取次ぎをしながら、イエスの祈りに与る。

＊キリストの王職；すべてを一つに集める王としての使命に与ると同時に「仕える者」となったイエスに倣うこと。

全ての人間は固有の使命が与えられている。それぞれの才能や恵みを生かして、全体の善のために使うことである。聖書はそれを「カリスマ」と呼んでいる。（１コリ12：7）

教会で信徒が奉仕する領域

福音宣教、要理教育、典礼奉仕、共同体建設、キリスト教的家庭の建設、青少年の育成、

夫婦の絆を強める運動(マリッジ・エンカウンター)、病める人への奉仕、高齢者訪問、

社会正義と平和、(社会の両親となること)、霊的同伴etc.

Ⅳ 奉献生活とは；

1. イエス・キリストの言葉と模範に基づいて、福音の精神を徹底して生きるよう神と人に奉仕する、キリスト者の理想的な生き方である。教会はこの奉献生活を一つの可能性、他の道と補い合う道としてとらえている。

教会の使命に奉仕するキリスト信者のある一つの身分である。徹底的にキリストに従った生き方をするよう招かれているのはキリスト者全員で、全ての信徒が目指すべき生き方であるが、奉献生活は、特別な形でキリストと教会のために身を捧げること、「唯一必要なものとして神のみを選ぶ」生き方である。自分全体を神に捧げるということは、他者への奉仕に生きること、

神の愛を人々に運ぶ器になることである。結婚という価値ある生き方を捧げる道で、その価は高い。日本の教会の発展に果たした修道会の役割は大きい。

1. 誓願の意義

修道生活の原点である貞潔、清貧、従順の福音的勧告は、イエス・キリストの姿を原点としている。主の言葉と模範に基づく、神と人を愛するキリスト者の理想的な生き方である。

　　　清貧、貞潔、従順は、それぞれこの世の富、自分の体、自分の精神を他者に委ねることをもって、神への全面的自己奉献を実現する。その意義はイエス・キリストに倣い従うことである。清貧、従順、貞潔が修道生活の柱である。

誓願によって自分の思うように生きる自由、財産（物）、結婚という「貴重なもの」を放棄するが、そのことによって、より大きな価値、神への愛こそが全ての価値であることを現わす。ただ一つの大切なこと、それは神に自分を自由に明け渡し、神に聴くこと、「神の国」のために自分の命を余すところなく与え尽くす生活である。

＊清貧；貧しくなったキリストに従うために、一切の私有財産を放棄して、生活の糧全てを修道会の兄弟姉妹と共有する。貧しくつつましい生活

富と執着から心を自由にし、ありのままの自分、本来の自分にとどまるとこを可能にする。富とは衣食住に限らない、才能、教育、評判、社会的地位など、人が生きていることが実感できるようなことすべて。（富と執着→名誉心、自負心、傲慢へ）

＊貞潔；キリストに倣い、神の国のための独身生活を誓うことによって、心と体、そして命までも主に捧げる生き方である。それによって、人々を愛する為の自由を持ち、普遍的な愛に成長する。

＊従順；死に至るまで御父のみ旨ご計画に従ったキリストのように、自分の意志を奉献して、長上の指導の中に神の心を読み取ることである。

３．祈りの生活；

個人的にまた共同での深い祈りなしには奉献生活を続けていくことはできない。

イエスが祈りを生活の中心においたように、修道者は神との一致を深める祈りを必要としている。祈りはまた福音を宣べ伝えるための必要条件である。

４．奉献生活への召命

現代社会においてどんな人が奉献生活を選ぶのか、それは人間の側の力だけでなされるものではない。自分の望みと神の選びが一つになるとき可能となる。教会の魂として位置づけられ、福音の真価を生きるという目的を果たすために奉献生活に入るのであるから、自分を超え、普遍的、世界的視野をもって使命を遂行する決意が必要である。

召出しの印は、奉献生活の中でいろいろ苦しいことがあっても、本当の自分が生かされ、日に日に自由に、より豊かに成長していくことである。

**まとめ**

「世界と教会は、キリストの真正な証人を求めています。そして、奉献生活はすべての人が『ただ一つ必要なこと』（ルカ10:42）を悟ることができるように、神がくださる賜物です。生活や仕事、そして言葉によってキリストを証することは、教会と世界における奉献生活に特有の使命です。」（ヨハネ・パウロ二世『奉献生活』結び１０９）